

京都大学	博士（文学）	氏名	山中 延之
論文題目	『易』の抄物による日本語史研究		
<p>（論文内容の要旨）</p> <p>本研究は、ともに文明9年（1477）に成立した抄物資料、桃源瑞仙（1430～89）『百衲襖』および柏舟宗趙（1416～95）講、横川景三・景徐周麟・聞書『周易抄』について、書誌学的ならびに日本語史的に検討を加えたものである。</p> <p>第一章は、桃源瑞仙『百衲襖』が主題である。第一節は『百衲襖』の成立・構成・書名の由来等について述べられている。「百衲襖」という書名は、元・胡一桂『周易啓蒙翼伝』所載の故事（宋・朱熹は、宋・朱震の『周易集伝』が諸説の羅列に過ぎないことを、綴れ合わせの僧衣（百衲襖）に例えた）に由来すると述べる。</p> <p>第二節では、『百衲襖』の助詞ノ・ガの使い分けについて考察が行われている。抄物には、ノは聖人君子に用いられ、それ以外はガを用いるという原則がある。ところが『百衲襖』は朱熹という同一人物に対してノ・ガを使い分ける点で例外的である。ただし、ノは「文公（ノ）」と諡とともに用いられる場合にのみ現れる。このことは諡に対して高い敬意が払われていたためであると結論づけられている。</p> <p>第三節では、『百衲襖』に見られる語句や初出例のうち、現行辞書に記載のないものが紹介される。第四節では『百衲襖』が口語体を取ることに意識的であったことを示す記事を紹介する。附節では、『百衲襖』の原典の一つ『易学啓蒙通釈』の序文から、著者・胡方平の没年が元・至元26年（1289）であることが明らかにされる。</p> <p>第二章では、柏舟宗趙・講『周易抄』が取り上げられる。第一節では『周易抄』の成立および主に建仁寺兩足院所蔵本の書誌学的考察が行われ、兩足院本の書写者が室町時代の同院住職・和仲東靖であることが明らかにされる。</p> <p>第二節では、『周易抄』諸本が、語彙の異同によって二つのグループに分類されることが指摘される。例えば、兩足院本には、イカメシイ・ヤモメ・ヨッポド等の語形が現れるが、天理図書館・京都大学文学部に分蔵される一本にはイカメイ・ヤマメ・エッポド等の語形が現れる。他の諸本もこの二つの系統のいずれかに属する。兩足院本に特有の語形は『日葡辞書』に記載されていることから、規範意識に基づく改訂を経た、新しい形であるとの推定がなされる。</p> <p>第三章では『百衲襖』『周易抄』の注釈態度の異なりが比較されている。『百衲襖』は逐語的に饒舌に解説をするが、『周易抄』は要点を簡潔に述べる。</p> <p>附章一は、京都大学文学部国語学国文学研究室蔵『兩朝三百首』（中華若木詩抄の一伝本）の解題である。特に漢詩部分に施された訓点に他の諸本と異なる点があることに注目し、訓読史研究上有益であると結論づけている。</p> <p>附章二では、抄物をさかのぼる鎌倉時代の口語資料として『却廢忘記』から3語を取り上げ、『日本国語大辞典第2版』の初出例をさかのぼる例として指摘している。</p>			

(論文審査の結果の要旨)

抄物とは室町時代に盛んに編纂された、漢籍や仏典の講義の記録である。聞書はその時代の講義口調が反映しており、口語的な言葉、表現が混じているところから室町時代の口語資料として利用されてきた。しかし注釈の内容が中国の儒教の経典や禅宗の経典であるので、難解である上に、説明に徹した無味乾燥の日本語で、読解は相当な苦行となる。内容の分析とともに、諸本の博搜から、本文の比較、そして編纂者の履歴やその学問的系統など、その成立の経過についても調査しなければならない。ほとんどの資料が原本調査になるので、閲覧するにも手間がかかり、禅僧のぞんざいな筆跡をたどって、彼らの主張を理解してゆくのはたいへん時間のかかる作業である。そういう作業を通して、ようやく日本語資料として用いられるのであるが、そこに現れる文法や音韻の現象から、論文にふさわしいテーマを見つけ出すことは容易ではない。労多くして、功の少ない研究対象であり、近年、若い研究者がほとんど居なくなってしまった分野である。

本論文は、抄物の中でも比較的早い時期に成立した、『百衲襖』(23冊)と『周易抄』(6冊)を研究対象とし、室町時代の日本語の研究を行ったもので、面倒な、幅広い調査と作業の結果である。

『百衲襖』は、臨済僧・桃源瑞仙の著した「易経」の注釈である。『周易抄』は柏舟宗趙の「易経」講義を、横川景三、景徐周麟が聞き書きしたものである。共に文明年間、応仁の乱に際して、桃源や横川たちが、近江・永源寺に避難している時期に作られたものである。

第一章では、『百衲襖』の成立、諸本などの書誌的分析などの基礎的な報告を行ったあと、百衲襖という書名が、朱子が朱震『集伝』に対して評した言葉に由来すること、建仁寺両足院本と京大本を対照することによって、京大本の方が書写は古いが、両足院本はルビまで丁寧に書写しており、両足院本に拠るべきことなどを明らかにしている。『百衲襖』の随所にある書写記録を丁寧に読解することによって、『百衲襖』の成立過程を跡づけ、桃源は後進を育てるということに重点を置いたため、漢文ではなく、口語的な片仮名文で編纂したことなどの文化的背景も明らかにしている。基本的な考察ではあるが、評価できる。

また、本書の中の、助詞の「の」(敬意あり)と「が」(敬意なし)の使い分けが、室町時代の基準に合致していることを確認し、朱子に対してだけは「の」と「が」が両用されていることを指摘した。朱子が「文公」と称される時にのみ「の」が使用されるので、「諡」に対する敬意の表れであると結論した。

語彙の面では、「くどい」「わらべしい」「けむし」などの語彙、「くさいものに蓋をする」などの諺などの初出の年代が100年以上、遡ることを明らかにしている。

付載されている『易学啓蒙通釈』の著者、胡方平の没年が不明となっていたが、その序跋から1289年に没したことを指摘したことも、些細なことであるが、着実に基礎的研究を積み重ねていることを示している。

第二章、『周易抄』の調査は26本の写本を分析整理し、両足院本と京大・天理図書館本の2書が重要であることから、両本を比較し、両足院本が書写の際、整理された可能性を論じている。また両足院本は、その筆跡と雅号から林家の一人で両足院住持も勤めた、和仲東靖の書写したものであることを明らかにした。このような筆跡や雅号による書写者の特定は、両足院の膨大な資料を幅広く丁寧に見ていなければできないことで、これも貴重な能力である。

『百衲襖』は後人のために書き残そうという意図から長い説明が多いこと、その傾向は桃源瑞仙が編纂した『史記抄』でも同じであることも指摘されている。桃源

瑞仙が、自らの学問的蓄積を後人へ引き継ぐことに意識的であったこと、それを林宗二たち、林家の一族が踏襲しようとしていること、抄物は語学資料としては扱にくいのが、中世文化を理解しようとする時、幅広い情報を持っていることが、本論文を通して窺える。指摘された現象の周辺にも、本論文が語る所が多い。

ただし、本論文には説明が不足するところも少なくない。口頭試問の際にいくつかの調査結果が漏れていることが分かった。あまりに雑多な、大量の情報があるため、調査結果を全て書き込むことは難しいとしても、重要と思われるものをできる限り書き入れておけば、説明不足は若干解消されたと思われる。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。なお、2014年10月16日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当分の間、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。